



笑顔とやる気いっぱいの七中 生徒自らが常に鍛え続ける七中

七中だより



第 9 号 中野区立第七中学校《学校だより》

令和2年8月7日
TEL 03-3389-4171

「3年生の引退試合」と「豊島園」

校長 池田 俊一

私は、8月1日2日の両日ともに3年生最後の試合応援に行く幸運に恵まれた。梅雨も明け心地よい風と少し強い日差しのなか硬式テニス、野球、サッカーの応援ができた。整列に臨む選手を見て思った事は、みんなこんなに大きく成長したんだということ、入学時の小さかった生徒が逞しくなって学校の代表として清々しくゲームに臨んでいく姿は、胸を熱くするものがあった、そして皆笑顔であった。勝ちも負けもそこまで、と限られた試合という状況が気持ちをリラックスさせたのかもしれないが、そればかりではなく、ここまで頑張ってきたんだという自信と仲間と最後の試合ができて嬉しいという素直な喜びではなかったかと推測した。先週の初めの放送朝礼で私は「3年生に言いたい。勝ち負けにこだわらず自分の習得してきたものを出切る事がこの大会の勝利だ。」と話したが、生徒はそのことをしっかりと分かって守ってくれたと感じた。どの学校のどの3年生にとっても最後のゲームであった訳だが、この大会が人生の特別のものになって欲しい。彼らにとってスポーツという文化を楽しむ生活はまだ始まったばかりなのである。コロナウイルスのお陰で特殊なラストゲームになってしまったが、得たもの残したものは素敵なものになっていく思い出として残ると私は思う。また、最後まで応援してくれた後輩達が得たものも大きい。この時期から代替わりとなり、新キャプテンとして夏季の練習に臨む2年生にも責任感が生まれたのではないだろうか。3年生の引退とともに、この後は暑い夏が待っている。

話は変わるが、先日テレビの番組で「豊島園」を扱

っていた。豊島園を愛してやまない人たちが出て熱く語っていたが、かく言う私も練馬の中村橋生まれであり、住居も中村橋と光が丘の二カ所にしか住んだことがなく身近には豊島園があった。園には沢山の思い出作りを手伝っていただいたので感謝しなければならない。園は大正15年のオープンと知り94年間ということで、戦争をくぐり抜けてきたのかと気づくと改めて時の長さにも畏敬を感じる。激動の昭和史の生き証人と言う事だと思う。私も齢60を越えたが、いい時を過ごさせてもらった。特にプールにはお世話になりました。昔は新聞屋さんが入場券や割引券をくれたことがあり、期限最終日8月31日に無理矢理行ったものだ。秋風が立つハイドロポリスの一番上で風に吹かれて、「何でこんな寒い思いをにしにきたんだ」と後悔したことも良い思い出だ。七中生にも江古田・江原の方々にとっても思い出の尽きない豊島園だと思うが、時の流れに閉園は必要な選択肢だったのだろう。そう考えると時は決して留まることなく過ぎてゆき、ものを成長させ、また老いさせてしまうものだと感じる。現在コロナの大きな影響を感じている私たちが、そんななかでも過ぎてしまう時をいかに大切にいかは大事なことだ。24日間の短い夏休みだけれど短いなりに充実させる術は必ずある、それを得るには各々が考え実行してゆくことそれ以外にはあり得ない。計画を立て、健康に留意し、豊かな経験を積んで記憶に残る夏休みにして欲しいと心から思うものである。

